

352 中央大学商科の地方見学

〔『法学新報』第23卷11(270)号 大正2年12月1日〕

○中央大学商科の地方見学 我中央大学商科学生は地方見学の

為め太田講師、佐藤幹事指導の下に去月十七日午後十一時新橋を發したるか此日暗雲低く單めて寒風瀟瀟征夫の秋情転た切なるものありき汽車は漆黒の闇を縫ふて走りつつ小田原を通り沼津を過ぐ若し夜行ならさりせは山送水迎吾人のささやかなる鑑賞意識をそそりたらんものを暫くにして闇に閃く一道の秋水は昔平家の殿輩か水鳥の起つ音に腰を抜かしたる富士川なれともかかる奔流激湍に水鳥の遊へりとは聊か矛盾したることならずや大井川の蓮台も今は昔の夢の跡現の裡に浜名湖を迎へし頃は夜来の雨全く霽れて湖上の青螺絵の如く白帆点点一眸の中にあり熱田駅に著きたりしは十八日午前十時なりし下車して先つ日本車両製造株式会社を視る同社は明治二十九年開業以来漸次發展して目下職工一千余人を使用し益々前途の曙光を認めつつありと云ふ吾等は時間の都合上詳細なる説明を聴取するを得ざりしは頗る遺憾とする所なれとも鑄鉄工場に入れり鉄具の鑄造より自由に各種の鉄材を処理する有様は宛然木材を扱ふか如く製材工場に到れば種種なる鋸鉋等か一の動力に因りて作業しつつある有様は確に亦一顧に価すべく夫より塗料工場及車両の組立て等を觀て同工場の視察を了し熱田神宮に詣れば老樹森森たる境内は閑として声なく千年の緑苔地に鋪きて俗履の塵を留めす廟貌森肅彩軒彫楹なしと雖尚神威の儼然たるを覚ゆ参拝を了り名古屋に入りて旅館に投し午餐を喫して後商品陳列館へと赴きたり該館は建坪一千五百余坪を有する洋式二階造の大建築にして結構壯麗六千二百余坪の地積内に巍然たる雄姿を横へ館内の整然たる配列、商品の豊富なる以て愛知商業の内容を窺ふに足

るへく一同仔細の觀察を遂げ出て安藤七宝店に至れば店主自ら案内の勞を執られ吾等を工場に引て製作上巨細の説明を与へらる同店階上に陳列しある透体七宝及び銅を用ゐて赤色を染出する方法等を聴き更に硬質陶器製造所に至りて製作上の説明を聴き製造の実況を視察して旅宿に帰り晚餐後は各自に市内の見物を為して寝に就けは肩足相磨する仮寝の床もここ一夜の浄土と化して夢は木曾路の勝景に飛ふこと頻りなり十九日黎明中央東線に依りて上諏訪に向へは山勢頗る蹙迫して嶮峻削るか如く土岐川其間を劈きて紺碧を湛ふる左岸を一峰に送られ一峰を迎へつつ進み行けは溪間に鬱蒼たる古松は燃ゆるか如き紅葉と色を変えて錦繡の如く風姿百変して極まらず一綫の小径川に沿ふてめくる所墨染の若僧三人袖を束ねて車を曳き来るを見る背景と相照応して其幽致高趣なる画中のものに髣髴たり多治見駅を過ぎ中津川駅を越ゆれば茲に木曾の一大溪谷を見るへし偶御料林の木材尺メ十万本を流出するに遇ふ其集散離合は只管水流を束ね瀾浪を遮らんとするに似たり奔湍激浪ここに至りて愈怒り其跳るや濤となり砕くるや沫となり溪に隨て転折し山と共に屈曲し瀉然として流注す其壯觀実に見状す可らざるものあり行き行きて寢覚の床の絶景を見三千二百尺の高所なる富士見駅を過ぎて雪を戴く駒か岳を右方に眺め薄暮岡谷の製糸場を一瞥して午後六時上諏訪著旅宿に投して晚餐後同町を見物し二十日払曉戸を開けは遠山茫として朝霧深く炊煙起らすして唯睡気なる鶏鳴を聞くのみ六時半汽車に投して帰路に就けは月は八か岳の背後に出て鈍き鉛白色の山容次第に透き徹りて桔梗色を帯ひ駒か

岳御岳等の連山漸く開けて麓の森に人家現はれ暫くして甲府市に著し下車して或は県庁に就き農産の実況を問ひ或は商業会議所に商況を聴き尚ほ市中の商店を視察して再ひ此駅を發し車窓より猿橋の奇勝を瞥見す既にして沛雨頻に至り又勝景の目に入るものなし斯くて夢裡新宿駅に著したりしは午後七時半なりき
(一行の一人)